

アトラスの深層

小説「アトラス」の解説

付・「東方の物語」

「鳥の人」

II

正道

目次

第7章 手塚作品の痕跡

(1) オマージュ	3
(2) 晩年の作品から	5
(3) 直接的な影響	7
(4) 「鳥の人」への影響	10

第8章 「月に待つ女」からの抜粋

(1) 第四福音書から	15
(2) 少女の幻視	18
(3) 「東方の物語」の制作	21

第9章 東方の物語

(1) 巨人の招聘	25
(2) 日当たりの問題	32
(3) だるま落とし	37
(4) 頭上からの圧力	45
(5) 石化	50

第10章 鳥の人

(1) 天と人の絆	53
(2) 不滅の恋人への手紙	59
(3) 神話と歴史	63

第11章 登場人物の名前

(1) 平凡な真実	73
(2) ベートーヴェンとのつながり	75
(3) おわりに	78

第7章 手塚作品の痕跡

（１）オマージュ

創作とは再構築

私の『アトラス』には、亡くなった手塚治虫氏へのオマージュとしての意味合いがある。オマージュとは、尊敬する先人の作品の要素を取り入れて制作した、二次的な創作作品のことだ。

そのため『アトラス』の端々には、数多くの「手塚作品の痕跡」が見て取れる。しかも、それは作品の骨格自体にまで及んでいるのである。

このように言うと、「それでは『アトラス』は、手塚作品の盗作に過ぎないではないか」と言う人も出てくるかもしれない。しかし、

「ならば手塚氏に、この『アトラス』のような作品が描けたか」

と問えば、それは到底不可能だっただろう。というのも『アトラス』の制作にあたっては、手塚氏が与り知らない、きわめて高次の「聖霊による助力」が働いているからである。

それでも納得がいけないという読者のために、ユングの次の言葉を掲げておこう。

傑作の細部は、必ずといっていいほど昔からあるものであり、やや大きめな（組み合わせられた）まとまった部分も、たいてい継承されてきたものである。

だからといって巨匠は、過去のもの全断片をひとつの新作へと同化することを、軽んじはしない。

われわれの心は、たえず根っから新しいものをつくりだすほど、際限なくゆたかなわけではない。自然も新しいものばかりをつくりだすのではない。（中略）自然は先行するものを土台にして、骨身を削って新しいものをつくりあげてゆくのである。

ユングの論文「潜在記憶」より

『心霊現象の心理と病理』

宇野昌人他訳に所収

記憶の中にある手塚漫画

次の節から「では『アトラス』の如何なる部分で、どのような手塚作品の影響が見られるか」という設問に答えていきたいと思う。

だが、ここに一つ問題がある。それは、私の手元に手塚漫画の実物がないことだ。押し入れの奥のほうにはあるはずだが、それを引っ張り出すには、かなりの労力がかかりそうである。労力だけでなく、時間も相当かかりそうだ。

そこで私は、いっそのこと、自分の記憶力だけを頼りにして、この第6章を成立させてみたいと思っている。つまり「私の記憶のなかにある手塚漫画」を用いて、『アトラス』の影響元、引用元を特定してみようと思うのだ。

これだと、もちろん情報の正確性は低下するだろう。けれども、それでもなお私が、かなり多くの手塚漫画の内容を覚えていることも事実なのだ。

手塚漫画を手にとって『アトラス』の参考にしていたのは、主に二十歳の頃だった。したがって私は、およそ二五年前まで記憶を遡ることになる（本書執筆時）。

つまり四半世紀分の遡行ということだ。何とも大がかりな試みであるが、それでもなお私には「手塚漫画についての色々なことを精確に覚えている」という自信がある。

むしろ私としては「何も見ずとも、こんなにも手塚氏の作品のことを覚えているのだ」ということを、皆さんにアピールしたいぐらいなのだ。

それが「熱心な手塚ファン」としての矜持である。もし引用に誤りがあれば、後日指摘してもらえばありがたいと思っている。

（2）晩年の作品から

三つの『ファウスト』

ではまずは『ファウスト』のことから書きはじめよう。

本書の第1章で述べたように、私の『アトラス』と、ゲーテの『ファウスト』には補完関係がある。

手塚さん（手塚氏だと、あまりに余所余所しいので「手塚さん」と表記したい）もまた『ファウスト』に魅せられていた。そのため生涯に三度もの『ファウスト』のカヴァーに取り組んでいる。

その内訳としては、デビュー間もない頃、世界名作文学のコミカライズとして描いた『ファウスト』が第一回目。

その次には『ファウスト』の舞台を、戦国時代の日本に移した『百物語』という作品を書いている。これが二回目で、昭和四六年に制作された。

そして遺作となった『ネオ・ファウスト』が三回目ということになる。

この『ネオ・ファウスト』は、グレートヒェン悲劇がまとまったあたりで中断されている。もちろん手塚さんの死によってだ。だが幸いなことに、その後のストーリーを示す、鉛筆書きのネーム（草稿）などが遺されている。

それによると、手塚さんは「クローン技術により、学生運動のリーダーの精子からホムンクルス（人造人間）を作るエピソード」を書こうとしていたらしい。

これは実に面白そうな話なので、中断されてしまったことが実に惜しまれる。

この話の元祖となる「ゲーテのホムンクルス」は、ガラスの容器から出られない、頼りない人工生命だった。こういった生態からの帰結なのだろう。ホムンクルスには、その人格にも肉体にも影がなかった。つまり「影が薄い」という表現の究極状態だ。

そのためホムンクルスは、人間として「出来あがる」ことを求めたが、結局彼をつつむガラス容器が割れて、そのまま海水に溶けてしまった。

他方、手塚さんのホムンクルス（学生運動リーダーである石巻のクローン）は、政治的理想を掲げて左翼的な主張をする予定だったらしい。

しかし、理想主義の左翼は「清濁併せ飲む」という芸当が出来ない。

そして現実の政治は、政治家の理想どおりに進むような性質のものではない。だから結局、理想倒れにより、左翼的主張は現実のなかで破綻してしまう。つまりその理念は、まるで海水に溶けて無くなるように中途挫折してしまう。

これは、学生運動の生き残りによる政党（民主党）が政権を担ったときの顛末を思い出せば、よく分かるはずだ。声高な理想論と、政治的無能の対照の見事さ！

となれば、『ネオ・ファウスト』のホームクルス（石巻のクローン）もまた、地に足を付けないまま、その人工的な生の終わりを迎えるのだろう。

ちなみに『アトラス』におけるアトラスもまた、ホームクルス的存在である。

この巨人には影がなく、人のように死ぬでもなく、ただ消えることだけが定めだった。そこに「泥の侵入」という“恩恵”があって、ようやく彼は、人間的な死を迎えることが出来たのである。人間的な死を迎えたとは「死への恐怖心」を持って死んでいったということだ。

トイレのピエタ

話を変えよう。さきに私は、『ネオ・ファウスト』を、手塚さんの遺作と言った。だが、手塚さんの死によって中断された作品は他にもある。『グリンゴ』『ルードヴィヒ・B』などがそれだ。これらはちゃんと書籍化されている。

しかし、ここでは本にもならなかった、ごく短い、けれども真正の「遺作」のタイトルを挙げてみたい。それが『トイレのピエタ』である。

その内容は以下のとおり。

胃ガンで死にそうになっている画家が、トイレの天井にピエタを描こうとする。もちろんそれは奇妙で異常な行動と言えるだろう。

だが水洗便器の「汚物に対する洗浄と浄化」という機能が、宗教的イメージとして、死にぎわの画家に、最後の創作意欲を与えたものらしい。

とすれば、彼の心の汚れを——水洗トイレとピエタで象徴された——母性原理が浄化救済してくれるのだろう。

「ピエタ - 洗浄 - 浄化」

何ともキリスト教的なストーリーだが、じつは私は、これによって初めて「ピエタ」という言葉を知ったのである。

もっとも、この『トイレのピエタ』は、胃ガンのため病床にあった手塚さんが、なかば朦朧とした意識のなか、病室で走り書きしたメモに過ぎない。

しかし実際のところ、これは十分な密度をもった「作品」であろう。少なくとも、題材としての魅力は十分に持ち合わせている。

だから高校時代の私は、それを元にして漫画を描こうとした。

結局、たった三ページで止めてしまったが、今思えば、それも仕方ないことであろう。女性恐怖症の高校生に「ピエタによる救い」などという母性的な話が描けるはずがないからである。

もっとも、私のあずかり知らないところで、『トイレのピエタ』は、実写映画として制作されたことがある。私はまだ観ていないが、それは二〇一五年に上映されている。

（3）直接的な影響

火の鳥『望郷篇』

ここからは、もっと具体的なところに切り込んでみよう。本節では「いったい『アトラス』のどの部分に手塚作品の影響が見られるのか」という点について直接的、逐次的な報告をしていきたい。

そうしてみると、まず最初に名を挙げなければならない手塚作品が『火の鳥・望郷篇』ということになる。私の『アトラス』が、その全体的なストーリー構成において、最も多くの規範を負っているのが、この有名な漫画だからだ。

かかる『火の鳥・望郷篇』の舞台は、宇宙ならびに地球系外惑星。まず主人公のロミという女性が、エデン 17 という名の星に「エデナ」という国を作る。このエデナの国民は、その全員が善良な性質を持っていた。

しかし、そこに武器商人ズダーバンが訪れる。自分の商品を買りたいズダーバンは、エデナを流れる川に、ある化学薬品を密かに流し入れた。

すると、その川の水を飲用水にしていた国民たちに、大きな性情の変化が起こる。すなわち彼らの気性が、急に荒々しいものになってしまうのだ。

そうして彼らは、すぐさまズダーバンの武器を買いあさるようになる。この延長線上で、国中で争いごとが起こり出し、エデナはついに荒廃の極みとなった。

これを看過できなくなった火の鳥が、ついにエデナを滅亡させるのだが、ここまで説明すれば誰にでもわかるだろう。これこそは『アトラス』のベース・ストーリーである。

このベース・ストーリーに「ディエス・イレ」の要素を付け加えると、本当に『アトラス』そのものになると言ってもいい。ディエス・イレは『アトラス』の第7章のタイトルにもなっているが、その言葉の意味するところは「怒りの日」である。

パウロは次のように言っている。

この怒りは、神が正しい裁きを行われる怒りの日（ディエス・イレ）に現れるでしょう。神はおののの行いに従ってお報いになります。

すなわち、忍耐強く善を行い、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠の命をお与えになり、反抗心にかられ、真理ではなく不義に従う者には、怒りと憤りをお示しになります。

新約聖書「ローマ人への手紙」より

そんな怒りの日にあって、永遠の命を恵まれたチェリアとアトラス。それに対して、結局は天の底に押し潰されるしかなかった、イドたち風穴の勢力——このような審判の対比は『火の鳥・望郷編』には無かったものである。

なお、武器商人ズダーバンは、キンナラの直接的なモデルであり、薬品を「民の性情変性」に利用するところも同じである。そして、その結果として、エデナでも、テピト・テアナでも、かつて善良だった世界が滅亡することになる。

ただし、ズダーバンはエデナの滅亡とともに死んだが、キンナラは最後まで生き残った。私には、どうもそうなることが、自然な流れのように思えたのである。

魔女と風穴

そういえばキンナラは、その個性が固まるまでに、手塚作品からの影響を、相当量身に受けているキャラクターである。

たとえば私は、『アトラス』において、ときにキンナラを「魔女キンナラ」と呼んだ。これは『三つ目がとおる』の「イースター島航海編」に、「かつてイースター島には魔女がいた」という話が出てくるからなのである。

その魔女はモアイを動かす能力を持っていた。そして彼女は、モアイを動かす代わりに、島民からエビを買いでもらっていた。

ところが、このエビがあまり獲れない年があったらしく、当然その年は貢ぎ物の量も減ってしまった。これに怒った魔女は、金輪際モアイを動かすのを止めてしまったという。

イドとキンナラが出会ったのは、イドがエビを採るために海岸に行った時のことだった。ここに「魔女キンナラ - エビ」のつながりを見て取れるだろう。

また、キンナラたちが住まいとしたのは「風穴」であるが、手塚さんの短編漫画に、その名も『風穴』というタイトルのものがあつた。

その『風穴』においては、マネキン人形を愛するカー・レーサーが、網目のような風穴（地下洞窟）に迷いこんでしまう。

彼は同行したライバルの励ましと導きによって、出口に到着することが出来た。ところが、実はそのライバルというのは、マネキンが変身したものだったのだ。たしか、そういうストーリーだった気がする。

破傷風を治すブラック・ジャック

あとは、『アトラス』の中では「地魔」と呼ばれている、破傷風について触れておこう。アサジの母親である、オロティアの命を奪った病気である。

この病気は、便利なストーリー上の小道具として、手塚さんが作品の色んなところで

使っている。

その中の一つ、古代の日本を舞台とした『火の鳥・黎明編』では、この破傷風を治すために、患者にアオカビを食べさせていた。これは、アオカビに含まれる抗生物質「ペニシリン」の薬効を期待してのことである。

しかし、破傷風の「症状」として、私が参考にさせてもらったのは、かの『ブラック・ジャック』のエピソードの一つである。

さすがに医療漫画だけあって、『ブラック・ジャック』には、様々な病気の症例が載っている。よって私のように、難しい医学書を読む気がない者にとっては、大変便利な漫画なのである。

そして破傷風が出てくるのは、ブラック・ジャックが海外で山賊に襲われる話だ。この山賊が布で顔を隠していたため、ブラック・ジャックは、犯人を特定することが出来なかった。

しかし、この山賊が破傷風にかかり、大きな痙攣をしながら死にそうになる。あのオロティアのようにだ。むろん、ブラック・ジャックがそれを治すのだが、彼は患者が「かつて自分を襲った山賊」だということが、すぐに分ってしまう。

というのも、山賊はひどいワキガで、破傷風の患者からも同じ悪臭がしたのだった。

ユフラテの樹

これは絵のほうの話であるが、『アトラス』の第7章「ディエス・イレ」に、バッチィーヤがキンナラを捕縛しようとして、かえって島民から不信の眼差しを向けられる場面がある。

その挿絵として、私は、冷や汗を流すバッチィーヤを、島民の顔が取り囲んでいるような図柄を描いた。

実は、この島民の顔の大部分は、手塚さんの『ユフラテの樹』という漫画に出てくるものである。たまたま、挿絵を描いているときに読んでいたので、オマージュ的に取り入れたのだ。興味がある人は元絵を探してみるのも一興だろう。

ちなみに、絵の構図に関しては、過去の大画家の絵を下敷きにしているものがある。ミケランジェロとゴヤが、その大画家にあたっている。

ミケランジェロを参考にしたのは、第3章「創世の物語」に出てくる「天上の生き物」の図で、有名な『アダムの誕生』のポーズを使っている。

ゴヤは、第9章で「キャンプ・ファイヤーでデルフィーを痛飲」みたいになっている場面だ。『鰯の埋葬』という絵の一部分を切り取って使っている。

(4) 「鳥の人」への影響

ボーダー・プラネット

これは本編の話ではないのだが、『アトラス』には、後日譚として『鳥の人』というタイトルの短編がある。この短編は、本書『アトラスの深層』の第10章にもなっている。

そして、この『鳥の人』は、ストーリー展開の点で『銀河探査 2100 年・ボーダー・プラネット』という作品の内容から、大きな影響を受けている。

かかる『ボーダー・プラネット』は、手塚さんが日本テレビの「24 時間テレビ」のために作った、スペシャル・アニメである。

『ボーダー・プラネット』のストーリーは次のようなものだ。

不治の病となった「片思いの相手（ミラ）」を助けるために、スバルは広大な宇宙を旅することを決めた。どこかの星に、ミラの病気を治すワクチンがないか、と考えてのことである。

この間ミラはコールド・スリープに入っているので歳をとらない。

やがてワクチンは見つかり、ミラはコールド・スリープから覚醒する。しかし、それまでに驚くほどの長い年月が過ぎてしまっていた。そのぶんスバルは歳をとってしまって、とてもミラに告白できるような有り様ではない。

若いままのミラとつきあうのは、スバルの息子である。スバル自身の隣には、宇宙探査の途中で出会った女性が、妻として座っていた。

最愛の人への想いを胸奥に秘めながらも、別の相手と結婚するという、どこか寂し気な晴朗感が、この『ボーダー・プラネット』にはある。その感じを、私は自分の『鳥の人』に取り入れたのである。

ただし、『アトラス』に感動した人にとっては、『鳥の人』は、寂しすぎる作品になるかもしれない。

オロンゴ岬の勇士たち

本節の最後に、手塚さんが「鳥の人（鳥人）」について語った文章を二つ紹介したい。幸い、これら二つの文章だけは、書籍の現物が身近にあったので、正確にテキスト（原典）の内容をお伝えすることが出来る。

さきに読んでいただくのは、『アトラス』の種子とでも言うべき「イースター島は世界のヘソだ」からの抜粋文である。皆さんにお見せする箇所は、アサジが勇者となるべく参加した選抜大会「タンガナ」の設定に影響を与えた部分だ。

なおアトラスの本編でも触れていることだが、「タンガナ」とは鳥の人という意味である。

〔オロンゴ岬の〕岸壁から目と鼻の先に、小さな島が見えた。

モツ・ヌイだ。

ディオニッシオは、草むらに点在する石を積み上げて造った奇妙な穴ぐらを指さした。「昔、島の選ばれた勇士が、十八人、このオロンゴ岬に集って、何日も閉じこもって修練したんだ。自炊した跡もあるでよ、ほれ。

それから全員集って祈祷師の儀式を受けて、それから一人ずつ海に飛び込んで、あのモツ・ヌイへ、泳いでったんだ。

あすこにゃ海鳥の巣がいっぱいあるんでね。その巣から卵を取って帰った者が、次期の島の長老になったってえ話だよ」

その祈祷の場所のあたりには、なんだか気味が悪くなるほど岩の一面に鳥の絵が彫ってあった。

よく見ると、それは鳥ではなく、体は人間だった。つまり鳥人だ。重なり合ってピッシリ岩に刻みこまれている。

鳥と人の合体

次に読んで頂くのは、月刊ニュータイプの付録、『手塚治虫 MEMORIAL BOOK』に収録されている「火の鳥と現代」という対談からの引用だ。対談の相手は、角川春樹氏であるが、引用したのは、もちろん手塚さんのほうの言葉である。

手塚——人間の原初の欲望のなかに“鳥と人間の合体”を望む気持ちが強かったんじゃないか？ と考えたんです。虫は別として、生き物のなかで空と通じ合ってるのは鳥だけだ、と。

われわれが空と言っているのは神の世界なんです。地下が神の世界だ、という宗教をもっている国はあまりない。太陽があり星がある。人間の生命と万物を支配するものがある空から、鳥は降りてくる。鳥は、神と人をつなぐただ一つの連絡係なんですね。

これは、まさしくタンガナ（鳥の人）の思想である。テピト・テアナに宗教があるとするれば、上の手塚さんの言葉こそが、その根本経典となることだろう。

さて、第7章「手塚作品の痕跡」はここまでとなるが、本章を閉じるにあたって、改めて手塚さんに感謝の意を述べたいと思う。

手塚さん、あなたがいなければ、私の『アトラス』もまたありませんでした。本当にありがとうございます。

第8章「月に待つ女」からの抜粋

（1）第四福音書から

十七歳の私

第8章に入ったとたんに何だが、つぎの第9章において、私は自分が17歳のときに描いた『アトラス』の元型を読者に見せようと思っている。タイトルは『東方の物語』である。

この作品の成立については、第四福音書の第一部「月に待つ女」で触れている。しかし、読者の中には、この作品を読んだことがない人も多いだろう。

そこでここに、第四福音書から『東方の物語』と関連が深い文章を抜粋して載せることにした。それは『アトラス』とも関係が深い文章なので、これを素通りする訳にはいかないのだ。

では、さっそくご覧いただこう。もともとの節タイトルは「女性恐怖、女性蔑視」である。

霊的世界との媒体

〔私は十七歳になった。〕ここで読者に「アトラス」のことを、話しておかなければならない。

「アトラス」は、私にとって「霊的世界との媒体」だった。つまり、霊的世界から情報を曳いてくるための、ストローのようなものだ。

たとえば占い師は、霊界からの情報を曳き入れるために、水晶玉という媒体を使った。きっと水晶玉のなかに、霊的世界のヴィジョンが映るのだろう。

まあ、そこまで直接的ではなくとも「透明な水晶玉を見ていて、そこに霊界からのインスピレーションが、象徴的に映り込む」というのは、いかにもありそうな話である。

同じ意味で、錬金術師にとっては、その化学的な作業が、霊界との媒体（＝インスピレーションを得る機会）であった。また仏教徒にとっては、座禅が、霊界との媒体であっただろう。

それが私の場合は「絵を描くこと」と「アトラス」だった。

少年期には、主に絵を描くことが、霊界との触媒になっていた。事実、小学生のときには、すでに、かの「アルベド侵入」のような事も起こっていたのである。子供のことから、そう大した絵を描いていた訳ではない。しかし、それでも当時の私は、確かに、

「これは本当に、自分が描いた絵なのだろうか」

「次に描くときには、こんな風には出来ないのではないか」

「自分にしては、これは上手に描けすぎたのではないだろうか」

といった、アルベド侵入に特有な「他人事」の感覚を味わっていた。すなわち、自分のなかに、自分のエゴ（自我）以上の存在である、アルテマ・エゴ（他我）の臨在を感じる場面が、ちょくちょくあったのである。

アトラスのこと

それが高校生になると、それまでの「絵を描くこと」から「アトラス」へと、媒体の移行が始まろうとしていた。

かかる「アトラス」は、その最終的な形態としては、小説作品となった。そして、その小説としての「アトラス」の執筆は、大体二十歳の前後からスタートする。

しかし、その最初の着想は、十七歳のときに与えられていた。すなわち、まさに女性恐怖症の只中で、創作の着想を与えられたものだったのである。

そのように、十七歳で着想を与えられた「アトラス」を、私は迷走しながら、暗中模索しながら、次第に明確な物語にしていっていった。およそ四年をかけて、一応の完成作品へと高めていったのである。

その四年の間に、アルベド侵入は、何度となく与えられた。そして、小説『アトラス』の一応の完結時には、私はついに「アルベド自体」の悟りへと達することになる。これが二一歳の時のことだ。

漫画と手塚治虫

しかしここでは十七歳の頃の、私の「女性恐怖症」の時代について語りたい。

表面だけを切り取れば、そこに「女性への関心を失った、浮世離れした哲学者」が現れる。ある意味で私は、昔の自分に立ち返ったのである。事実この頃の私は、本を読んでは、哲学的、神学的思索に耽っていた。

そんな中でも、大好きな漫画は「読んだし描いたし」だった。当時の私の「主な創作活動」は、まさにこのジャンルを中心としたものだったのだ。いつときは、本気で漫画家になろうと思っていたぐらいである。

主として読んでいたのは、手塚治虫さんの作品だった。日本を代表するこの漫画家については、とくに説明の必要性もないだろう。

何を隠そう、私は手塚治虫さんの「大ファン」だった。それは、彼の漫画以外の「周辺書籍」まで愛読していたことから分かる。すなわち手塚さん本人のエッセイや、関係者の追悼文集まで、私は嬉々として読み漁っていたのである。

ちなみに追悼文集というのは、私が中学三年生のときに、手塚さんが亡くなってしまったから、発生したものだった。享年六〇歳。

そして、そうした周辺書籍の中に『イースター島は世界のヘソだ』という紀行文があった。手塚さんがイースター島に赴き、そこで「世界のヘソ」と呼ばれる奇岩を見つけるという筋立てである。

（２）少女の幻視

まぼろしを視る

そのとき初めて、この紀行文を読んだのか。それとも、以前に読んだものを再読したのか、このあたりは定かではない。

ただ、この女性恐怖症の時期に、私が『イースター島は世界のヘソだ』という紀行文を読んだこと。そして、その読書中に「幻視」を体験したことは間違いない。

幻視とは、文字通り「まぼろしを視ること」である。私はそのとき、ある少女の幻を見たのである。

それは、自分が死ぬしかない状況にあって、それでも巨人（モアイ）たちの死を見守ろうとする、少女の姿だった。彼女は涙を流しながらも、その顔に笑みを浮かべていた。それは、とてつもなく寂しそうな笑顔だった。

そうした少女の姿がありありと、ほとんど前触れもなく、私の眼前に現れたのだった。

それは明らかに、一つの啓示だった。霊的世界からのメッセージだった。だから私は、この少女の幻視に対して、何らかのリアクションをとる義務があった。

そして、それは漫画家を目指していた私にとっては、この場面を用いた、ひとつの漫画作品を描くことに他ならなかった。

幻視への拒絶

だが、当時の私には、到底この少女の姿を、受け入れることが出来なかった。

その理由を一言で言えば「女性恐怖症だから」ということになるだろう。だが、ここでは、それをもう少しだけ詳しく語りたい。

当時の私の心は、明らかに理論的な思考スタイルのなかに閉じこもっていた。そうして理論的でないものを「こんなものは下らない」と蔑視しながら生きていた。

そして、そのように理論的でないものの最たるものとして、女性の感情というものがあった。

だから当時の私は、徹底的に女性を蔑視していた。心の裏側に女性への恐怖を隠しながら、心の表側では、そのような非理論的な感情を抱く女性を、徹底的に蔑視していたのである。当時の私は、まさに、そういう卑怯な臆病者だった。

だから少女の幻視を見たこの時も、合理性ばかりが肥大した臆病者が、必死になって叫び声を上げた。つまり私の心中で猛然と、悩乱した叫び声が上がったのである。

「分からない！」と。

そうやって叫ぶばかりでなく、幻視した少女を、私は責め立てずにはいられなかった。ほとんど執拗なまでに、彼女を責め立てずにはいられなかった。

「自分の死を覚悟しながら、それでも巨人たちの死を見守るだって？

馬鹿な、そんなことに何の意味があるというんだ。生きていればこそ、お前は、他人のために尽くすことも出来るだろうに。

それなのに、死んで何になる？ そんなの、ただの自己満足じゃないか。そんなの、ただの自殺じゃないか。そんな馬鹿らしい死に方をするなんて、女というものは、なんて愚かしい存在なんだ！」

ユダとの相似

今になって思うのだが、私が「幻視の少女」に対して言っていることは、ほとんど「ユダ」が言っていることと一緒である。

すなわち、私の言葉は『ヨハネによる福音書』において、あの「裏切り者のユダ」が言っていることと、じつに驚くほどの同通性を見せているのである。

恥を晒すようだが、ここで読者にも検証してもらいたい。

聖書によれば、それはもうイエスの死が間近い頃のことである。ベタニアのマリアが、高価な香油をイエスの足に塗り、それを自分の髪で拭った。

このマリアの非合理的な行為に対して、ユダはきわめて合理的に反駁する。「なぜ、この〔高価な〕香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか？」

つまり「そうすれば、いま無駄に流れている香油は、大いに人々の役にたつだろうに」ということだ。

さらにユダは、同じマリアに対して、こうも言いたかったことだろう、「そんな事も分からないなんて、お前はなんと愚かしい女なのだ！」と。

しかし、イエスが祝福して受容するのは、合理的なユダの言葉ではなく、非合理的なマリアの行為のほうである。イエスはこのとき、ユダの言葉をさえぎって、マリアの行為を誉めるのだ。

マリアを愛でるイエス

イエスは言う。

「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それ（香油）を取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない」

これを、もう少し分かりやすく表現すれば、次のような言葉になるだろう。

「彼女のしたいようにさせなさい。彼女は香油を塗って、私の葬儀の準備をしてくれているのだ。彼女はいま、最も価値があることをしているのである」

それを聞いて、ユダは引き下がらざるを得なかった。

『アトラス』の完結時に明らかになった事だが、幻の少女がしていたことも、本質的には、このマリアの行為と同じことだった。

それは極めて個人的な、真実味に溢れた「葬儀」なのである。なのに十七歳の私には、その葬儀の価値が全く分からなかったのだ。

よって当時の私は、ベタニアのマリアの愛も分からない、イエスの気持ちも分からない、あの憐れむべきユダにそっくりだったのである。

しかもユダは、のちに「合理的に」周りの状況を鑑みて、イエスを裏切ることになる。そして私にも「合理的に」自己内の神性を裏切り（＝無視し）、神の計画を白紙にしてしまう可能性があったのである。いま振り返ると、何とも恐ろしい時期だったと思わざるを得ない。

(3)「東方の物語」の制作

東方の物語

さて、これまで見てきたように、私もまた、ユダと同じように「合理的に」少女を裁いた。「女というものは、なんて愚かしい存在なんだ！」と。

ここまで言うのだから、私は明らかに、幻視した少女を拒絶したのである。換言すれば、彼女に「こっちに来るな」と言っているのである。

そして、そんな私が、かようにも拒絶している相手を「敢えて取り上げて」だ。あまつさえ、自作の漫画の主人公にすることなど、出来ようはずもない。

そのため高校生の私が編んだ「アトラス」は、主人公である少女が登場しない「アトラス」となった。

ときに、二一歳のときに完結をみた『アトラス』は、大まかに言えば「モアイの生起譚」である。つまり「モアイはどのように誕生したか」を説明する物語である。

そして高校生の私もまた、
「かつて生きて動いていた巨人が、石像となり、モアイと呼ばれるようになった」
という内容の物語を書いた。

それは形式としては絵物語であり、短文と絵が、サンドイッチ状に積み重なって構成されていた。

もっと分かりやすく言えば「だいたい絵本の書式に近いもの」と言えば当たっているだろう。それを『東方の物語』という題名で、クラブ活動内で発表した。

この東方とは、イースター島の「イースター」を訳した“つもり”の言葉である。

むしろ本当は、イースターとは「キリストの復活」を意味する語である。今の私はそれを重々知っている。しかし、高校生のときの私は、そのような知識を持っていなかったのだ。

だから当時の私は、イースターを、イースト（東）の語尾変化だと思ってしまった。それがゆえの「東方の」物語の上梓であった。

単純な勧善懲悪

それはさておき、かかる『東方の物語』は、ごく短い物語だった。なにしろストーリーが単純そのものである。

「ある島に、悪い島民がいて、善良な巨人たちがいる。巨人たちは島民に殺されるが、島民たちも死んでしまう。つまり、人を呪わば穴二つということだ。ただし巨人たちは、その姿を、石像として後世に残すことになった。それがイースター島のモアイである」

実際『東方の物語』とは、ただこれだけの話である。

一種の勧善懲悪ものであり、ストーリーとしては、実に理性的で、明快そのものだ。これだけ内容が単純ならば、それは物語が短くもなるだろう。

それに比べて、最終的な『アトラス』は、だいたい本三冊分ほどの分量がある。しかもそこでは、ストーリーと登場人物が、複雑に絡み合っている。もちろんそこで「幻視の少女」は主人公として大いに活躍する。

こちらを先に読んだ人は、それが『東方の物語』と同一の根っこを共有しているとは、到底信じられないだろう。この二作品には、それぐらい大きな差異がある。

ぱっと見でも、片や分厚い大長編である『アトラス』、片や二〇ページほどの『東方の物語』。自分でも驚いてしまうが、「幻視の少女」という要素を失ったとき、アトラスの物語は、これほどにも小さく縮こまってしまうのである。

結局のところ、当時の私には「心の複雑さと女性性」を受容するための器が、決定的に欠けていた、ということになるだろう。

第9章 東方の物語

（１）巨人の招聘

人間なんて勝手なものですよ。
だいたい、
いい人っていなかったんだよね、
この島には。

だから神さまも怒っちゃって、
この島の空を低く低く落として、
島民をおしつぶそうとしたんですよ。

島民はおそれおののいちゃって、
上を見ながらふるえていたんですよ。

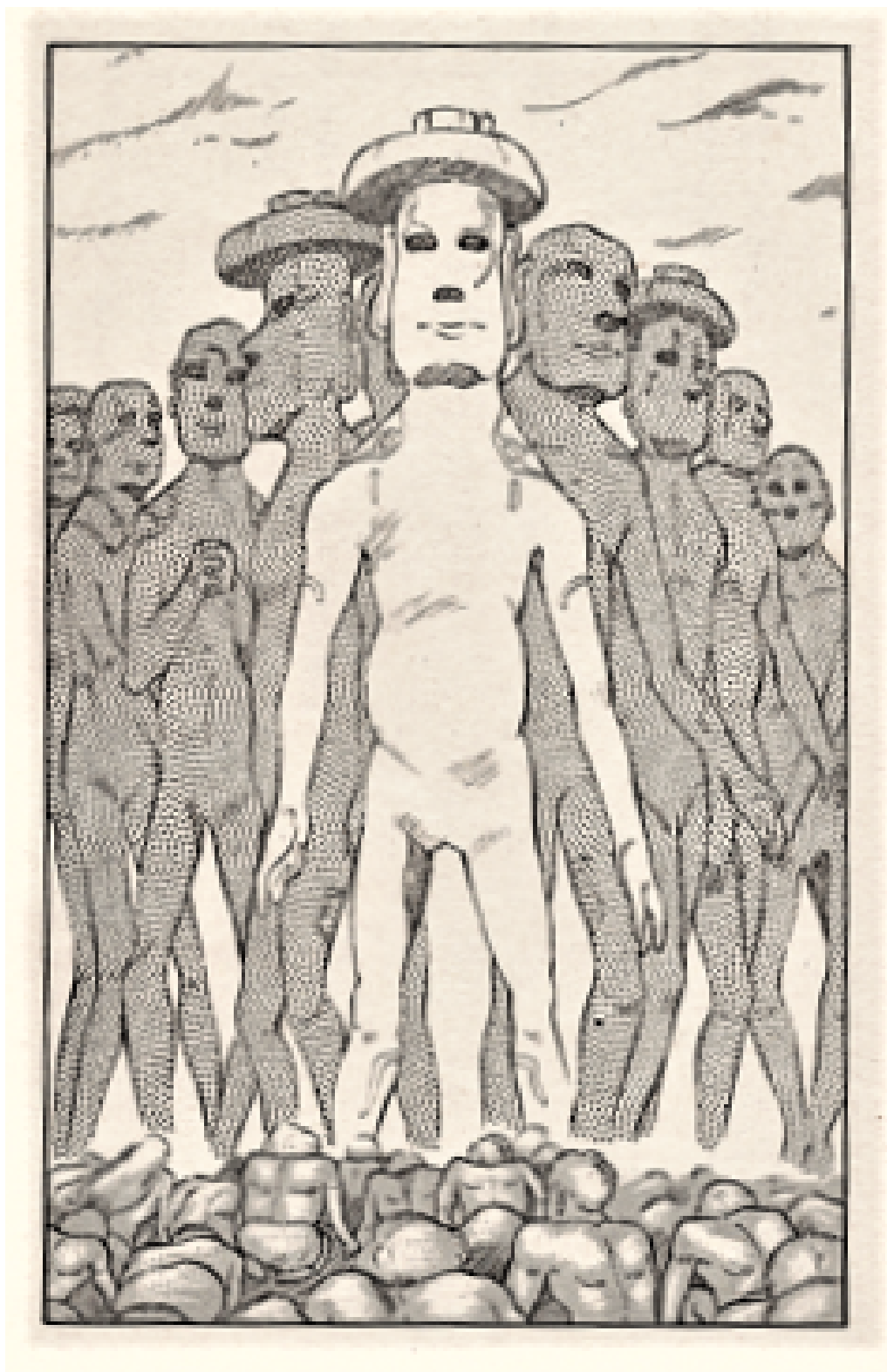


でも死にたくないんで、北の国から、
アトラス族のみなさんを
呼んでくることになったわけ。

アトラス族ってのは、

北国で空を支えてる、
大きな大きな、
信じられないくらい大きな人。

でも、アトラスさんたちは、
責任感があってやさしくて、
ちっともこわくない、
神さまの血をひく、
高等な種族だったんですよ。



島民たちは、額を地べたにすりつけて、
アトラスさんたちに、
空を支えてくれと平身低頭。

アトラスさんたちは、
それで君たちがたすかるならと、
快くひきうけてくれたんですよ。

かくしてアトラスさんたちは、
島の空を支え始めたわけで、
島中にアトラスさんたちが
立ちほだかったんですよ。

当然空は、
上のほうで止まって落ちてこない。
島民たちは、手ばたきして喜び、
アトラスさんたちには大感謝。



これで、めでたしめでたし。
 もう問題はないって、
 みんな思ったんですよ。
 その時は。

でも、それでは終わらなかった。
大きな問題があったんですよ。

(2) 日当たりの問題

なんといっても、
アトラスさんたちの人数の多いこと。
重い空を支えるには、
千人のアトラスさんたちが
必要だったんですよ。

おかげで、
日があたらなくなっちゃったわけ。
それぐらい、
ガマンすればよかったんですけどね。



人間なんて勝手なものですよ。
だいたい、
いい人っていなかったんだよね、
この島には。

半年もすると、島の人たちはね、
もう空が落ちてくることもないだろう、
って思い始めたんですよ。

で、アトラスさんたちにいったわけ、
「あなたたちは、
もういなくてもいいんだ」
って。



アトラスさんたちは動かなかった。
かわりに島民に言ったんですよ。
やさしい口調で。

「今わたしたちがいなくなったら、
空が落ちて、みんな死んでしまうよ」
って。

「私たちは、みなさんを守るために、
死んでも動きませんよ」
って。

アトラスたちは本気だったんですよ。
アトラスたちは、
やさしい人々だったんですよ。

(3) だるま落とし

でも島民たちは信じなかった。
はやく出てけと、さけび回った。

とうとう島民の一人が、
とんでもないことを始めたんですよ。
五〇センチはあるかという木づちで、
だるま落としをね。



ただのだるま落としじゃないですよ。

アトラスの足を、
横からぶったいたんですよ。

それごときで、アトラス人は、

びくともしないと思うでしょ。
でも悲しいかな、
そうじゃなかったんですよ。

アトラスたちはね、
上からの圧力には強いけど、
横からの衝撃には弱い、
たまごのような一族だった。

アトラスたちを
良く思っていなかった島民たちは、
みんなして同じことを始めたんですよ。



カコーン、パコーン、スコーン。

カコーン、パコーン、スコーン。

一千人のアトラスの足が飛び、

ももが飛び、腰が飛ぶ。
空がどんどん落ちてくる。

カコーン、パコーン、スコーン。
カコーン、パコーン、スコーン。



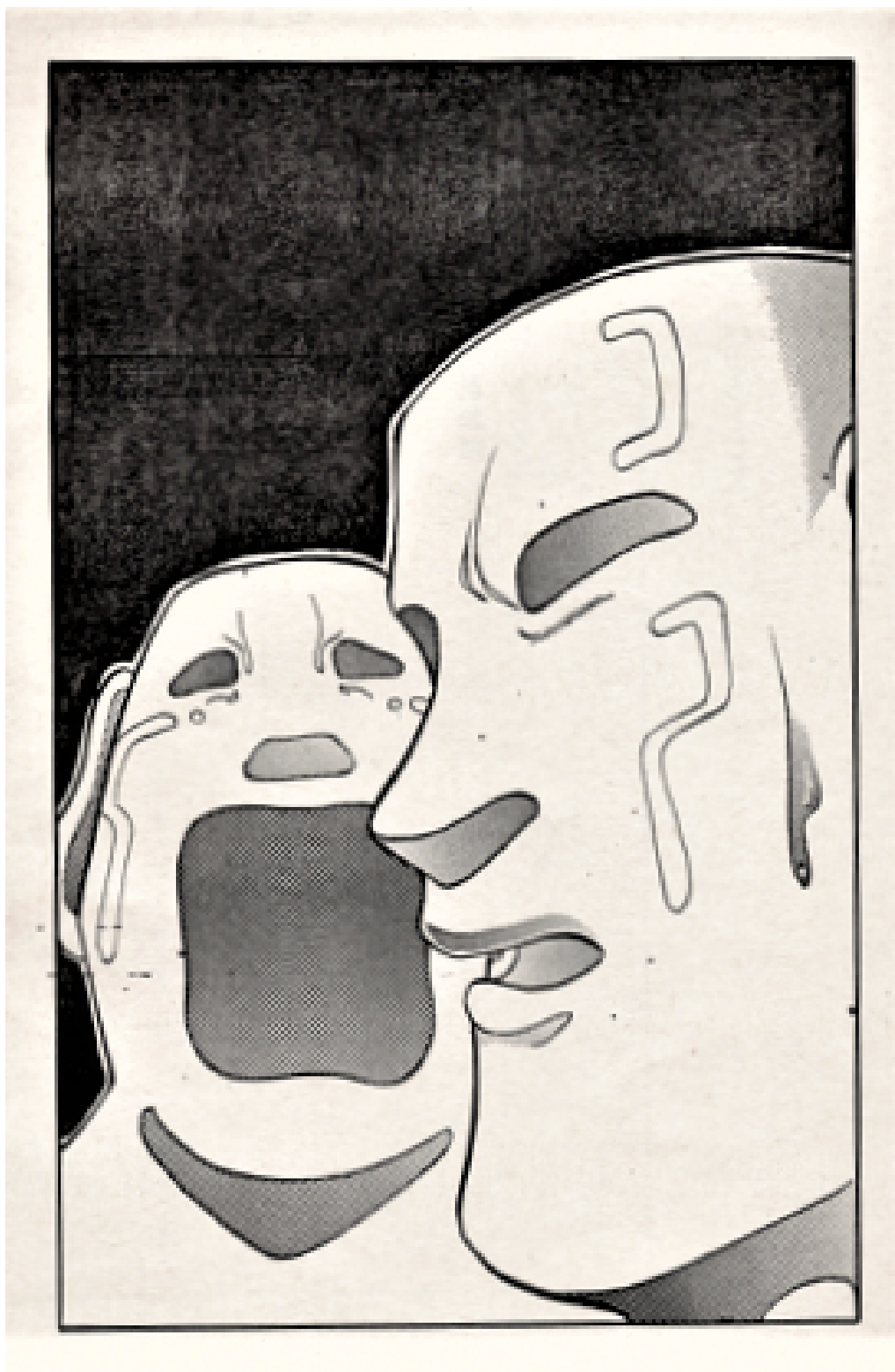
千人のアトラスたちは、
それでも空を支えたんですよ。
ただこの卑しい

島民を生かすためだけに。

なのに島民は、
自分のためだけにアトラスを打った。
アトラスは悪者、
自分のやっているのは正義だと。

カコーン、パコーン、スコーン。
カコーン、パコーン、スコーン。

カコーン、パコーン、スコーン。
カコーン、パコーン、スコーン。



（4）頭上からの圧力

アトラスは、必死に空を支えたけど、
とうとう胸と頭だけになっちゃった。

そのときやっと気づいたんですよ、
島民は。
自分の頭が圧迫されてるのを。

でも、遅かった。
島民は、
木づちをなげだして逃げようとした。



でも、おそかった。
空は島を、
信じられないぐらいの圧力でおしつぶした。

頭と胸だけになったアトラスは、
もう命はなく、

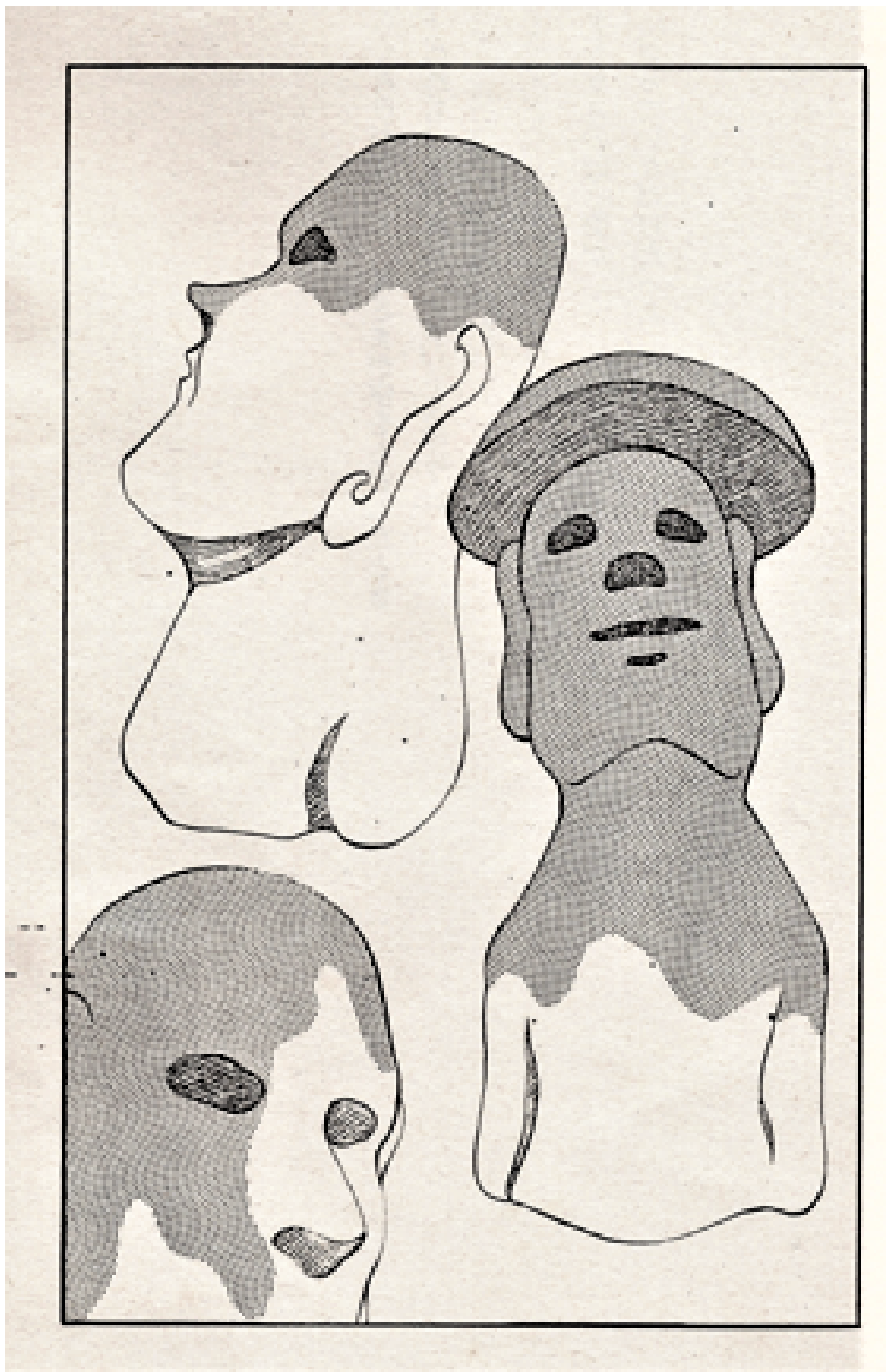
空の圧力でおしつぶされた。

島民たちはペタンコ。

形が分からないほどになっちゃった。



押しつぶされたアトラスは、
体の成分が、圧力で石にか変わった。
島には、一人の人間もいなくなった。

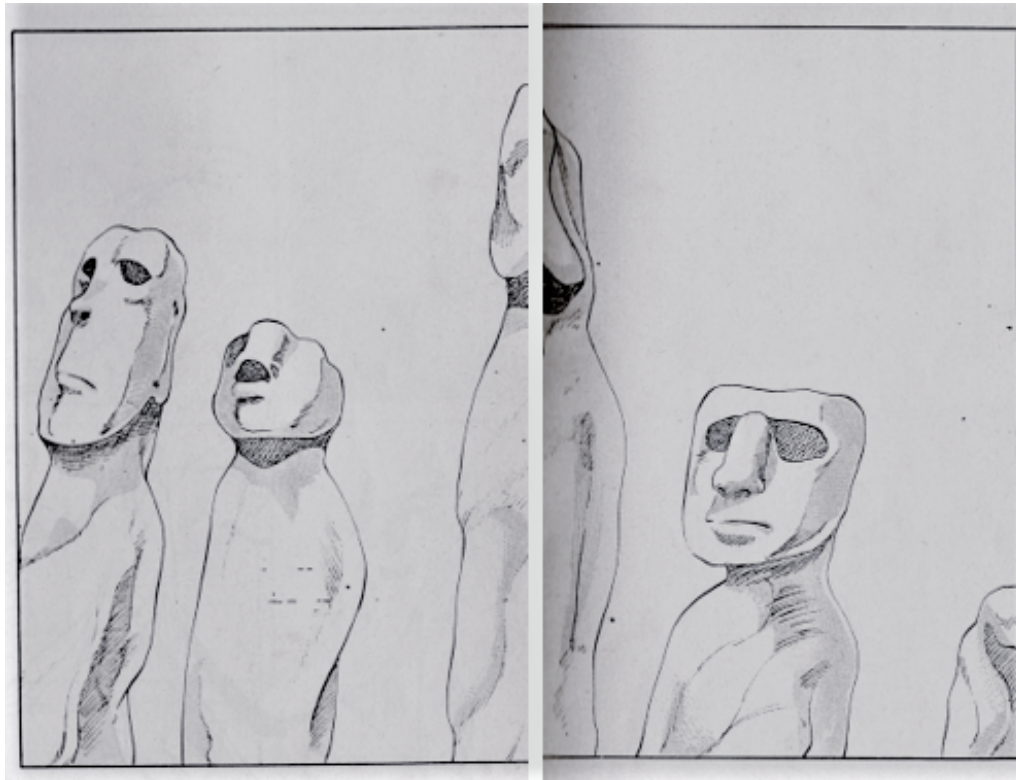


(5) 石化

しばらく月日がたって、
神さまが空をもどしたとき、
島は、だれもない世界。

ただアトラスの頭と胸が、
島中に立っていただけだった。

今ぼくたちがイースター島にいけば、
きっとアトラスにあえるだろう。
石になったアトラスを、
モアイという名前でね。



第 10 章 鳥の人

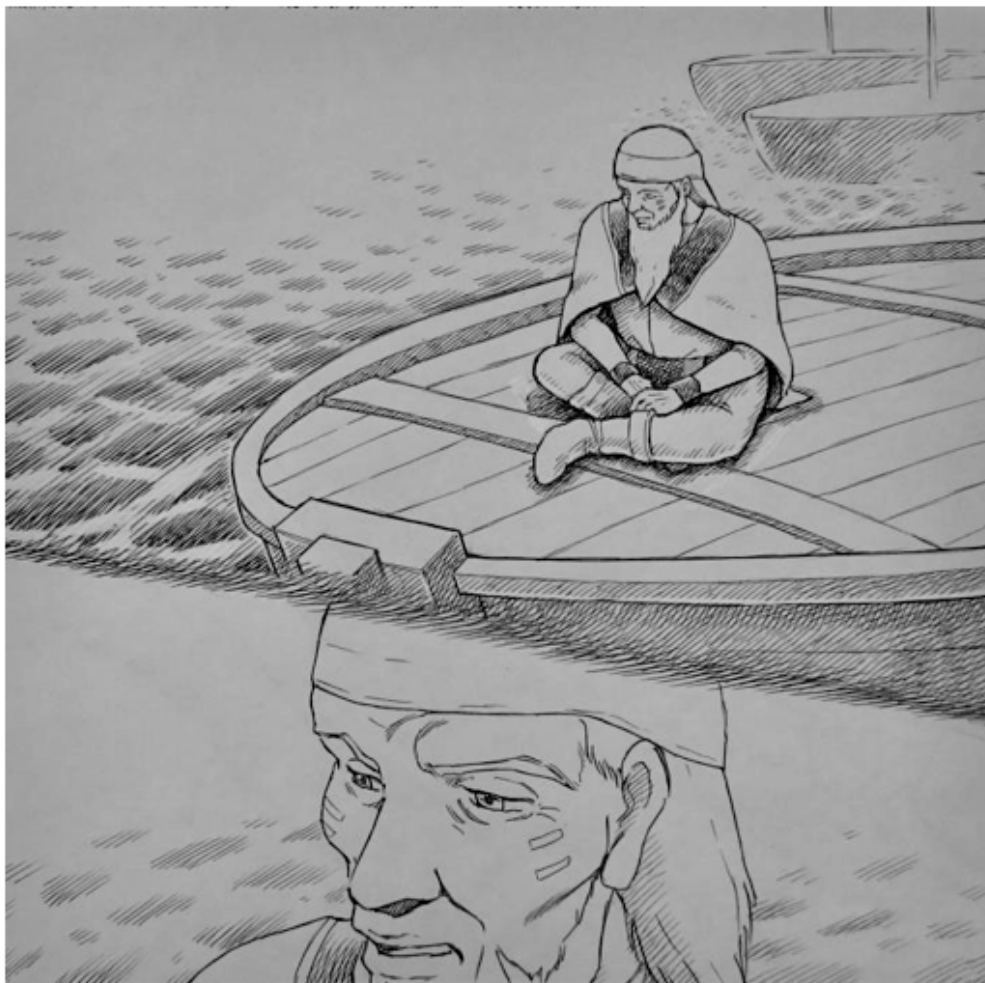
（1）天と人の絆

青いアトラスの体軀を思わせるような青天のもと、穏やかな春風に凪いだ海上を、五隻もの船が悠々と航行していました。かつてのテピト・テアナに向かって——今では、もはや誰一人として、暮らす者のいない島に向かってです。

その先頭を切る船の先端には、長い髭をたくわえた老人の姿がありました。彼は、斜めから照りつける日差しに向かって、皺だらけの右手をかざしています。

老人は、いかにも寂しそうな表情を露わにしていますが、やがて遠い島影が見えてくると、とうとうその澄んだ目に涙さえ浮かべました。

「チェリア……」



そう呟く老人は、しかしバッチィーヤではありません。

今では見る影もありませんが、涙ぐんで巫女の名を洩らす彼は——あの日、島の滅亡を逃れた、アサジの年老いた姿に他なりませんでした。

あれから五〇年も経っているのでしょうか。いつしか老勇者となったアサジは、なかば不自由になった体で船団を率い、今生の見納めとばかりに、故郷テピト・テアナを目指していたのです。

船団がゆっくりとテピト・テアナに接近していくと、やがて人々の目に、ラノ・ララク山麓にあたる海岸線が見えてきました。

ところが、さあ上陸という段になって、その海岸周辺に転がっている、大小さまざまな石くれが、船団の着岸をひどく困難たらしめます。

「なんだこれは……昔はこんなもの無かったはずだぞ」

そうアサジが言います。

それでも何とか船が岸に着けられると、老いた乗船者の誰もが、喜び勇んで、かつての故郷へと降り立ちました。

この船団の構成は、老人が全体の約三割を占めています。この老いた三割こそが、テピト・テアナを「故郷」と呼ぶ人たちでした。そして、これに各老人の付添いとして、二人の壮年者や若年者がつく、という形を取っていたのです。

北の大陸の人々と交わることによって子や子孫を得た老人たちは、混血種である若者たちの助けによって上陸を果たします。そして、各々、自分がかつて住んでいた村や家を探すべく、覚束ない足取りで、内陸部のほうへと歩いていきました。

「私もゆく、か……」

眼前のラノ・ララクの山稜を見上げながら、アサジが呟きました。そして、ようやく人影が減った海岸に足をつけたアサジは、その昔アトラスたちが立っていた、ラノ・ララク山の中腹に向かっていきました。

青いアトラスがああ後どうなったのか、それを確かめたく思ったのは勿論です。ですが、それと共に、

（そこに行けば、チェリアさまの魂に触れ合うことになるだろう）

という思いもありました。この思いは、山を登るアサジの背中を押しもし、また歩みを躊躇わせるものにもなっていました。

（私は、こんなにも逢いたいあの方の魂に、しかし本当に会ってよい人間なのだろうか。あの方を見捨てることによって、「島の勇者」としての資格を失った私であるのに……

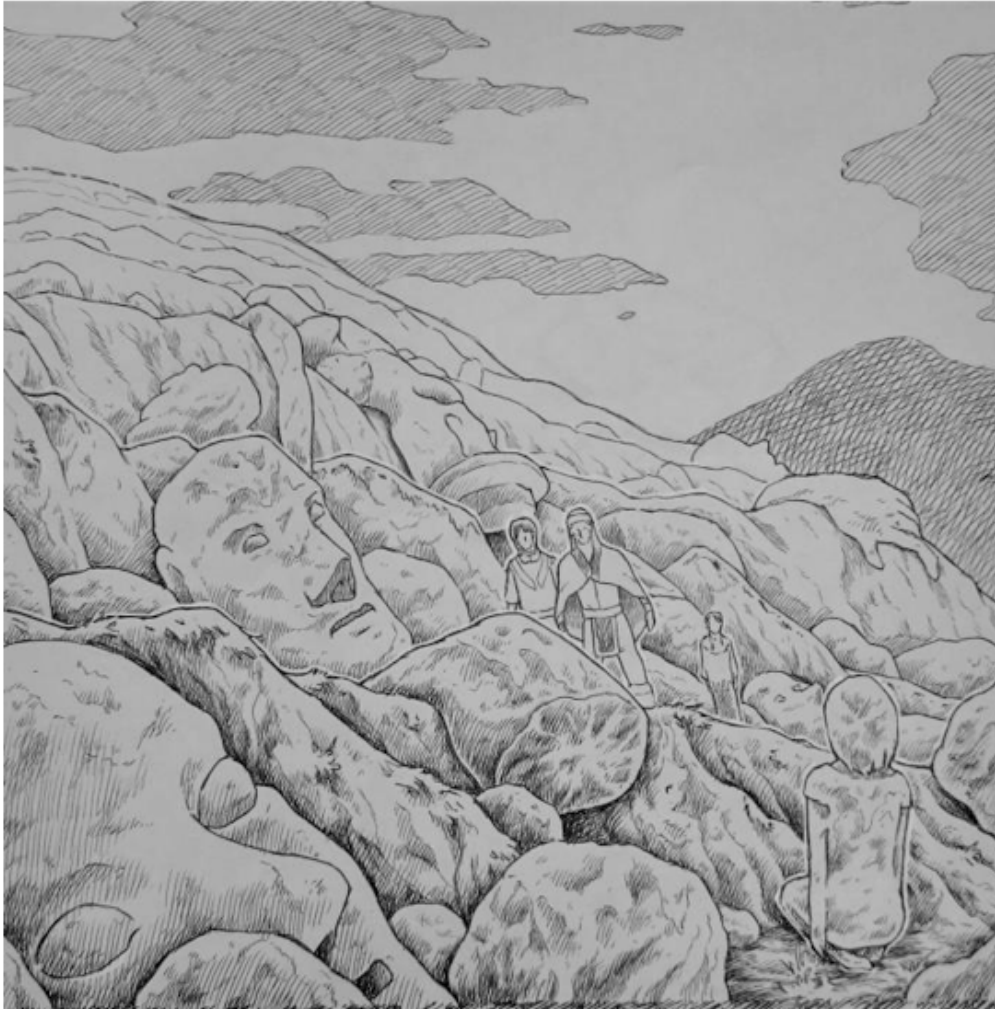
だが逢いたい。本心を言えば、どうしようもないほど、あの方に逢いたいのだ）

そう思うと、足取りが早くなったり、また急に遅くなったりもします。

そんなアサジの落ち着いた足取りを気づかって、船上でも常にアサジに随行していた中年女性、および二十歳前後の青年が、彼のあとを追いました。

アサジの視線が、ラノ・ララク山の中腹まで達すると、彼はそこで、まるで劇的な一瞬が、そのまま時間の中で凍りついたかのような情景にまみえることになりました。

「こ、この石像は一体！」



彼にしてみれば、そう叫ばずにはいられなかったでしょう。

正座をして一点をじっと見つめる少女。そして、その少女に向かって体を這わせ、ついに倒れざるを得なくなったアトラスの姿。

そこには彼の首だけが、うつ伏して倒れていましたが、それでも、息づかいさえ聞こえてきそうな石像の表情が、最後の時を迎えようとしていた、巫女と巨人の痛切な心情を伝えて、余すところがありませんでした。

「なぜ石になっているのだ？　どうやら山頂で噴火が起こったようだが、この石像が、溶岩が固まることによって出来たとは、到底考えられぬ。溶岩と石像は、確かに別々のものだ」

このように超時間的な光景を前にすることによって、アサジは予期していたよりも、

ずっと生々しく、また直接的に、往時の記録を胸に刻むことになりました。

それは、まずもって得難い収穫ではありましょう。たとえるなら、曖昧な足跡しかないと思ったら、鮮明な写真が残っていたようなものですから。

しかし、そのようにありがたい反面、そのあまりに衝撃的な光景は、この朽ちかけた老人の心に、場違いなまでの熱情を呼び起こす機縁ともなりました。

それは本当に、老体の脆弱さにそぐわないほど、青くて激しい熱情でした。すなわち、歳を重ねることによって矯められたかと思っていた激情が、今さらながらに、昔の熱気をそのままに、心の奥底から溢れ出してきたのです。

アサジは、急いで自分の口を押えて、ギュッと目をつぶりました。

(唇が熱い！ あなたが唇を重ねてくれた、この私の唇が熱い！

ああ、チェリアさま、あの日、私は島から逃げ出しました。いえ、あなたから逃げ出しました。私に、あんなにも温かな口づけをくれたあなたから、卑怯にも！ 勇者なのに！ 勇者なのに！ あなたを守るべき者なのに！)

それは、今のアサジにとっては、危険なほどの激情でした。

彼の目からは滂沱の涙が流れ、ふと気がつけば嗚咽が止まらなくなっています。その肩はわなわなと震えて、膝にも腰にも力が入りません。まるで老朽化した建物が、地震で一気に倒れていくかのようです。

自分の妻となるはずだった女性との思い出に圧倒され、その切なさに崩れ落ちようとしているアサジの頭上から、ひと声、海鳥の嘶く声が響きました。

「ギュー！」

「鳥が……」と呟くアサジの脳裏に、はるか昔の情景が浮かびます。アトラスたちを、北の大陸からテピト・テアナへと連れてきた朝の情景です。

すなわち、鳥が飛んでいる姿を眺めながら、うれし涙を流すチェリアの顔が、アサジの脳裏にありありと浮かんできたのです。

「テピト・テアナに鳥が飛んでいるのですね」

チェリアはそう言いながら泣いていました。その巫女の涙に驚くアサジに、チェリアが説明してくれた言葉の一つ一つまでが、明瞭な輪郭をもって、いまや老人となったアサジのなかで蘇ります。

「アサジさん、私はつい昨日まで、一羽の鳥も空を飛べないような島で、あなたが帰って来るのを待っていました。それこそ鳥を見れば、それが骸でしかないような島で。そんなにも悲しいテピト・テアナで、本当に、涙を堪えるようにして、あなたの帰りを待っていたのです」



2023-05-24 \ (44 \).png

そして、老人の幻のなかで、チェリアが笑います。

「けれど今日、空を飛ぶ鳥の姿を見ることによって、私の苦しみは消え去りました。今日という日を、永遠に祝福したい気持ちです。

だって、あんなにも待ち焦がれていたアサジさんに会えて……しかも、しかもですよ。昨日までと同じ島にありながら、こうして鳥が飛んでいる姿まで見る事が出来たのですから。私にとって、今後、今日よりも嬉しい日があるとは思えません」

朝陽に照らされて光る巫女の横顔、その横顔に浮かんだ微笑みを思い起こすと、老いたアサジは、もう立ってもいられなくなりました。

彼は危うく倒れそうになり、両脇に付き添っている男女によって、かろうじて体を支えられました。

俯いたアサジは、涙を流したままで、自分を支えている若者に言いました。

「ナーマン、お前は上手に絵を描くことが出来たな……」

「え？」

「お前に描いてほしいものがある。どのような図案でもいいから、どうしても『人と鳥が永久に共にある姿』を描いてほしいのだ。人と鳥が仲睦まじくしている絵を、この島に残しておきたい。

きっと、いつか誰かが、この島を訪れる事もあるだろう。

その時に、お前の絵を見た彼らの心に、我々の祈りを……一つの世界を滅ぼした民の、悔悟と祈りを伝えるために……」

そんなアサジの言葉に、ナーマンと呼ばれた若者が、少し首を傾げながら問いました。

「どうして鳥なのですか？」

「……わしはこう言いたいのだ。すなわち、傲慢さは、羽ばたく翼の重石にしかならない、と。傲慢さを捨てて、高く、高く飛んでいく鳥のようになれ。鳥こそは、天と人の絆。天にまで届く、人間の憧れの象徴なのだから、とな」

ナーマンが、アサジの言葉に満足したように、温かな声をもって答えました。

「分かりました、父さん。鳥が、天と人とを結びつけるということですね。早くも図案が浮かんできましたよ。たぶん、いいものが描けると思います」

「そうか」

「ええ。それに、願ってもないことに、ここには上質の石がいくらでもある。絵は、その石を削った『浮き彫り』として仕上げようと思います」

それを聞いて、アサジは大きく頷きました。が、同時によろめきもしました。つまり首を頷かせただけで、体全体のバランスが崩れたのです。老いとはそういうものです。

彼の様子を心配そうに見守りながら、肩を貸している女性が、これを見るに見かねて言いました。

「行きましょう、あなた。ここにいる限りは、あなたの涙は止まることはないでしょう。この場所は、チェリアさんの存在感が強すぎる」

「チェリアさまの……」

「ええ、今のあなたは、まるで強いお酒にあてられた人のようです。私は心配でなりません。体を壊すまえに船に戻ったほうがいいと思います。

船室に帰れば、またいつものように、私があなたの昔話を聞いてあげましょう。話したいだけ話したら、そのうち、あなたの気持ちもおさまるでしょうから」

息子のナーマンも同じ意見のようでした。彼がアサジに言います。

「父さん、母さんの言う通りだよ。もう船に行こう、少し風が出てきた」

そして老人は、その言葉に従いました。

(2) 不滅の恋人への手紙

「形だけのもの、簡易なものに過ぎないが、それでも亡くなった者たちの墓は立て終えた。あとは、北の大陸に帰るばかりだ」

と、アサジたちの船団は、到着から十日ほどの逗留をただけで、島を離れる準備を始めました。彼らに「帰るべき場所」があること。長逗留によって、雨季を迎えてしまっ
てはならないこと。この二つが主たる理由です。

それは元テピト・テアナ人の誰もが分かっていることでした。しかし、いざ北の大陸
に戻るとなると、やはりどうしても、後ろ髪を引かれるような思いが止められません。

こうした重い空気の中、完成披露されたナーマンの浮き彫りだけは、皆と同様の寂寥
を抱えているアサジの顔を、それでも笑顔で綻ばさずにはおきませんでした。



2023-05-24 \ (45 \).png

「すごいな、ナーマン。これはまさに、決して別たれることのない“天と人の絆”だな」
そこに刻まれていたのは、人と鳥が融けあうことによって、一つの生物となった姿でした。人と鳥の両者は、もはや二度と離れられない形状を取ることによって、永遠の契りを結んでいる。そのようにも見えます。

つまり簡明に言えば、そこには「鳥人」と呼ぶべきものが彫られていたのです。そして、その原始的で直截的な表現が、いわば「絶対に離れない！」という決意の強さとして機能していたのです。アサジもまた、この決意の強さに感銘を受けたようでした。

「すばらしい彫刻だよ、ナーマン。これならば、後世にこの浮き彫りを眺めた者は、必ず私たちの祈りを感じ取ってくれるに違いない。そして、その私たちの祈りが、きっと人類の滅亡を遠ざけてくれるだろう」

ナーマンが、このアサジの評価を喜んだことは言うまでもありません。

それからアサジは、「最後にもう一度だけ」と言って、ラノ・ララク山の中腹に登りました。もちろん今回もまた、彼の妻と息子が付き添いをしています。

アサジは万感の思いをこめてチェリアの座像を眺めました。そして、その切なげな父の眼差しを見ると、ナーマンには自然と、昨夜聞いた「母の独り言」が思い出されました。彼は偶然、母の重大な独白を聞いてしまったのです。

昨日、彼らの生活の場である、船室の中でのことです。ナーマンの母は、隠れるようにして、誰かの墓標を刻んでいました。彼女は小刀を使い、掌に乗るぐらいに小さな「木製の墓」を作っていたのです。

しかし、その出自を北の大陸とする母にしてみれば、テピト・テアナで誰かの墓を建てる義理など、あるはずありませんでした。

ですから、その行為は極めて奇妙なものでした。ですがナーマンは、物陰で母の独白を聞くことによって、そこに実に深い意義が込められていることを知ったのです。

船室の中であって、母が虚空に向かって語ります。

「チェリアさん、私はこの島に、アサジの墓を残していきます。私の主人であるアサジ、まだ生きているアサジの墓を、この島に立てていこうと思うのです。

もちろん、あの人が生きているかぎり、私はずっと彼を支えていくつもりです。ずっと彼と一緒にいるつもりです。

ですが……いつか死んで霊となったアサジは、どうしてもチェリアさんの傍にあるべきだと思うんです。だから、この島にアサジの墓を立てていくのが、一番いいことだと思うんです」

ナーマンは、この時点で、すでに胸を突かれるような思いがしました。しかし彼の母は、もっと胸が苦しくなるような言葉を、このあと続けたのです。

「私はアサジが、チェリアさんに宛てた手紙を持っています。

アサジは、紛失したと思ってるでしょうけど、本当は私が盗ったんです。見つけたのが、まだ若い頃だったから、悔しくて盗ってしまいました。

ふふ、笑ってやって下さいよ。でも、この歳になって、ようやくアサジの気持ちを尊重できるようになりました。

このアサジの手紙は、テピト・テアナから、北の大陸までの海路で書いたもののようです。チェリアさん、私が読みますから、どうかよく聞いてください。

——そうです、私は決心しました。

あなたの腕に飛び込んでゆけて、あなたのところで、まったく故郷にいるような思いがすると、そう言えるようになるまで、私の魂が、あなたにつつまれて霊の国に送り込まれる事が出来るようになるまで……それまでは遠い場所をさまよい歩こうと思います。

そうです、残念ですが、そういうことにならざるを得ません。あなたは、あなたに対する私の忠誠を知っているのですから、それだけに取り乱すことはないでしょう——

これは、私が知るかぎり、もっとも古いアサジの手紙です。宛名には『不滅の恋人に』と書いてありましたが、それがチェリアさんの事だということは、すぐに分かります。本当にアサジはチェリアさんが好きなんですね。

でもチェリアさん、私は『自分がチェリアさんに負けてる』と思っている訳ではないんですよ。

今のアサジの中で、この私は、きっと『大切な女性』として存在しています。彼は確かに私を愛してくれています。

それを少しも疑わずに済んでいるからこそ、私は、彼の心の、その一番奥底にある気持ちを尊重する気になったんです。

私が尊重したいこと——それは、アサジの心の奥底で、チェリアさんという女性が、未来永劫に渡って、輝きを放ち続けるということです。

チェリアさん、あなたという人が、アサジの胸中で、忘却の川に流されることは絶対にありません。本当に、絶対にそうなんです。だからこそ、永遠である霊の世界では、私は、アサジの魂をあなたに返してあげたいと思うのです。

だって、もしアサジがあなたを愛していなかったら、そういう過去を持っていなかったとしたら……私は、北の大陸に渡ってきたあの人を、きっと好きにはなっていなかったと思うから。

そう、結局あなたは、アサジと一つなのです。あなたはアサジの一部なのです。だから遠いところに、互いのお墓があってはならないんです」

ナーマンは、母の言葉を聞きながら、必死に嗚咽を堪えていました。芸術家気質の彼は、母の謙譲の精神に、心から感動せずにはいられなかったのです。

そして、その翌日である今日、ナーマンは、母がチェリアの座像の横に何かを置くのを見ました。あえて見確かめたりはしませんでした、それが何であるかは、ナーマンにはよく分かりました。

(3) 神話と歴史

アサジたちの船団が島を発ったのは、それから三日後のことでした。前述したように、ちょっと早いようでも、どうしても出立を急がなければならなかったのです。

それ以上の長居をすれば、雨季と時化の海を迎えることによって、彼らの船団は、際限ない足止めを余儀なくされていたでしょうから。

そして、これ以降、テピト・テアナの住民だった人間が、故郷に戻ることは二度とありませんでした。誰もいなくなった島では、かの石像たちだけが、虚しく人の姿を残していました。

他方、北の大陸には、まだ数百人のアトラスたちが立っていました。しかし、そのアトラスたちの身体も、ようやく完全に空に溶けている時を迎えたようです。

と同時に、ちょうど九十歳になったアサジが、巨人たちの足元に築かれた集落において、その息を引き取りました。



2023-05-24 \ (46 \).png

その際にアサジが呟いた、
「チェリア……」

という讒言をもって、言い伝えや昔話ではない「アトラス」の物語は、ついに終わりを
を見たと言えるでしょう。少なくとも、主人公たちの姿はなくなりました。

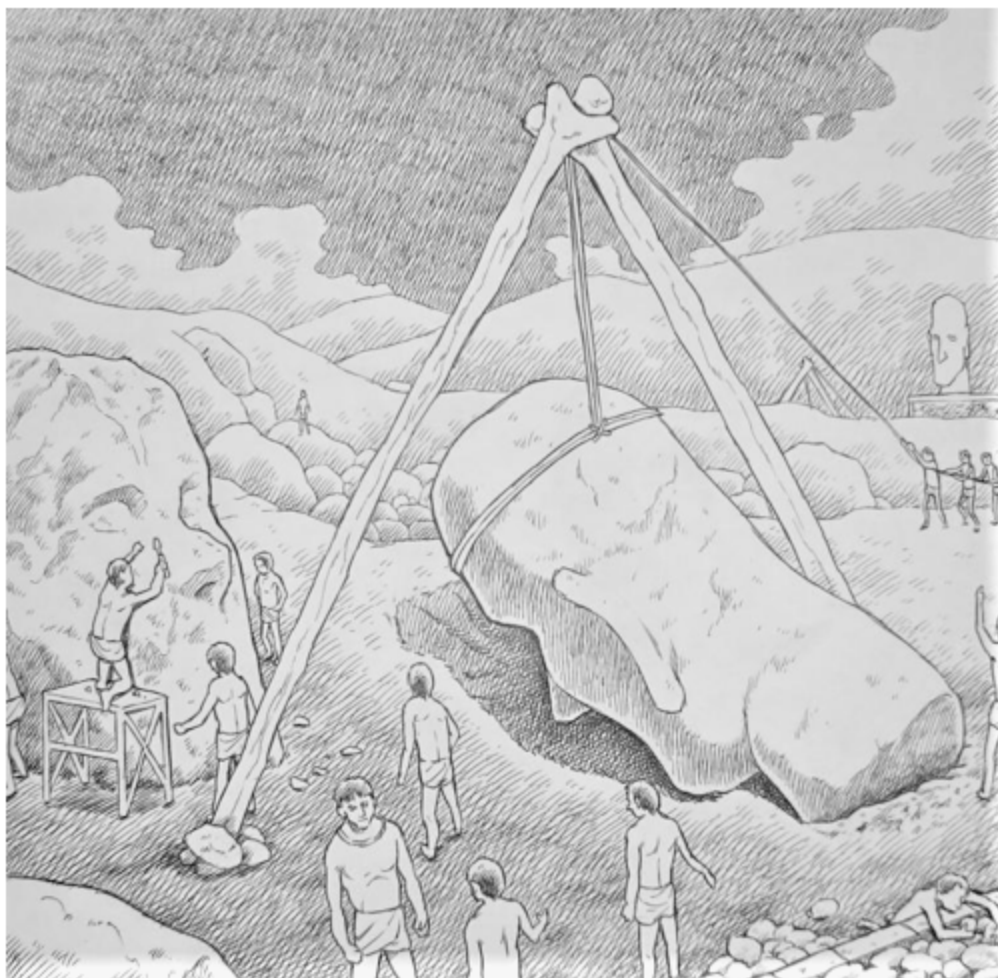
静寂だけが延々とテピト・テアナを支配し、石となり果てたチェリアの姿は、いつし
か背の高い雑草の間に、音もなく埋もれていきました。

こうして誰もが忘れ去った島、かつてのテピト・テアナに再び人が足を踏み入れるに
は、苦しい航海の途次、偶然にここを発見する、東方のマルケサス諸島の住民を待たね
ばなりませんでした。

このマルケサス諸島の住民が新しいテピト・テアナ人となる訳ですが、彼らについて詳しい話をする必要はないでしょう。

ただ、彼らがアトラスたちの首の石像、ナーマンの浮彫、またバッチーヤが遺した島の記録などを見いだしたこと。驚き訝りながらも、それらの遺品から、彼ら独自の「神話と宗教」をつくり出したことは、どうしても言及しておかなければなりません。

その宗教の教義の帰結として、彼ら新テピト・テアナ人は、アトラスの石像や鳥人の浮き彫りの複製を大量につくり出しました。つまり彼らは、巨人と鳥人を崇拝し、さらには、その崇拝対象の数を一挙に増やしたのです。



とくにアトラスの石像にいたっては、その宗教的情熱によって、もともとの三百体が一千体にまで膨れ上がったのです。石像の材料が、島に潤沢に存在していたことについては、今さら指摘するまでもないでしょう。

こうした流れの中であって、小さすぎて目立たなかったチェリアの石像だけが、何の囚われもなく、ただ西風に吹かれていました。

彼ら新テピト・テアナ人の宗教は、その後も長い期間にわたって忠実に守られていった。西暦一七二二年にこの島を発見したオランダ人、ヤコブ・ロッゲフェーンは、人々が巨人像の前で火を焚き、跪いている様子を母国に報告している。

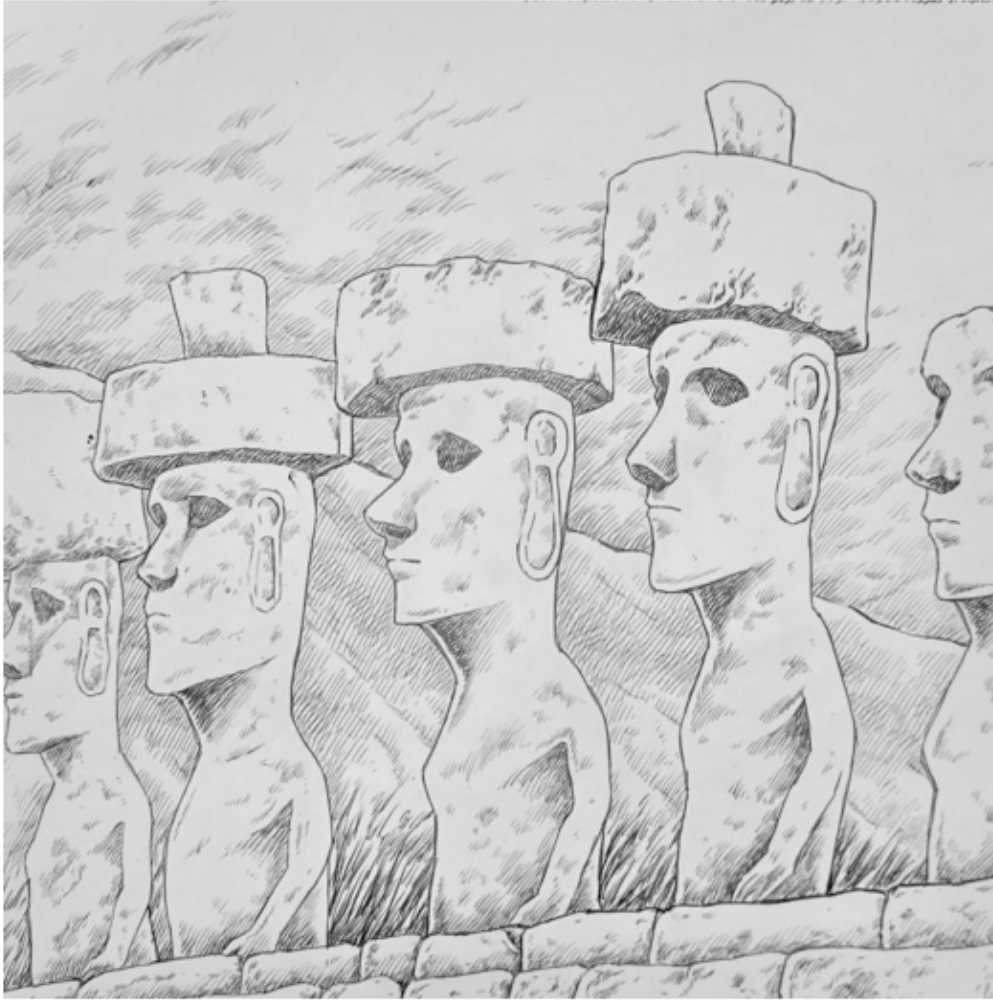
しかし、ジェームズ・クックというイギリス人が、一七七四年に訪れたときには、巨人の石像群は、なぜかその殆どが押し倒され、中には破壊されたものも多かったという。

この五〇年間に島で起こったことを書き連ねることはしないが、それでも、この間に当時の重要人物のあらかたが島を去ったこと。彼らが島の記録の大部分を持ち去ったことばかりは、ここに明記しておかなければならない。

歴史はこの島において、記録の代わりに、人々が永遠に解くことが出来ない謎だけを残したのである。



2023-05-24 \ (48 \).png



2 0 2 3-05-24 \ (49 \).png



2023-05-24 \ (51 \).png



2023-05-24 \ (50 \).png

『鳥の人』 完

第 11 章 登場人物の名前

(1) 平凡な真実

アトラスの一部だった『鳥の人』

前章の『鳥の人』は、いかがだっただろうか。あの『アトラス』の後日譚である。

だが実は、もともとの作品は、『アトラス』の本編に、間断なくピッタリと組み込まれていた文章だった。

すなわち最後の、

「歴史はこの島において、記録の代わりに、人々が永遠に解くことが出来ない謎だけを残したのである」

という所から一行空けて、

「さらにまた時が経って、もう、あれから、どれぐらいになるだろう……」

というエピローグが始まる形を取っていたのだ。それが、もともとの『アトラス』だった。

しかし、二八歳のときに、徹底的に『アトラス』のストーリーの「流れの良さ」を追求したとき、私は、この『鳥の人』の部分を削除してしまった。おそらく、この決断は、『アトラス』の完成度を上げることに限っては、大きな寄与となったことだろう。

ただ、削除したままにするには惜しいだけの内容が『鳥の人』の箇所にはあった。少なくとも私にはそのように思えた。

そこで、これを『アトラス』の後日譚として独立作品化したのである。こうして皆さんにお見せした『鳥の人』が生まれた訳だ。

アサジは不実か

『鳥の人』の主人公はアサジであるが、彼はかつて、タンガナという遠泳競技によって勇者になったのだった。

イドを破り、海燕の卵を獲得して。カラマの「失格！」の台詞を覚えている読者もあるだろう。

そして、このタンガナという競技の語意が「鳥の人」だったのである。このことが、イースター島で現実にあっただけの鳥人崇拜とリンクして、『鳥の人』のストーリーとなった訳だ。もちろん作品の根底には、手塚さんの、

「人間の原初の欲望のなかに“鳥と人間の合体”を望む気持ちが強かったんじゃないか？

と考えたんです」という言葉が息づいている。

そして『鳥の人』に登場するアサジには、彼の妻と息子が寄り添っている。すでに述べたように（第7章）、この設定には、手塚さんの『ボーダー・プラネット』が影響している。

だが、女性の読者のなかには「アサジには、ずっとチェリアだけを見ていてほしかった」という方もいるかもしれない。それなのに再婚して、あまつさえ子供まで作るとは……

こうなると作者も「アサジはあまりにも、チェリアに対して、不実なのではないか」と読者から責められてしまいそうだ。

けれども、アサジが独身を貫いて死んだとしたら、私は作品を通して、自分が嘘をついているような気持ちになってしまう。

だって私自身からして「初恋に忠誠を誓って生涯独身を貫く」などということは、絶対に出来そうもないのだから。

いくら設定としてキレイであっても、そこにリアリティがないならば、それは単なる嘘にしか過ぎないだろう。

キレイな嘘よりは、平凡な真実のほうが、よほど価値はあると思う。それが私の思想的なスタンスである。

(2) ベートーヴェンとのつながり

不滅の恋人への手紙

私にとっては「最愛の人への思いを胸に秘めて、その上で新しい恋をし、大人の男として家庭を築いていく」ことのほうが、よほどリアリティと価値がある。

正直なところ、私もいまだに初恋の人を想い続けているが、それが妻や家庭に対する不実だとは思っていない。むしろ「過去を断ち切らなければ、新しい恋は出来ない」などという話のほうが、あまりにも短絡で味気ないと思うのだ。

過去を断ち切り続ければ、人格の膨らみ、豊かさなどは、絶対に獲得できなくなる。逆に、過去を認め、これを大事に積み重ねてこそ、人格は広く、高く形成されていくはずなのだ。

罪ですら、そこに悔悟を伴えば重要な宝となる。むしろ罪も犯さず、悔悟もしない人間の過去よりも、それは価値が高いものになると思う。

アサジも、アサジの妻も、またそう考えたのだと思う。だから彼らは再婚もしたし、子供も作った。

しかし、やはりアサジの心の一番奥底にはチェリアがいる。彼にとってチェリアは、生涯にわたって不滅の恋人なのである。いや、正確には「不滅の妻」であるが。

そんなアサジの気持ちは、彼の妻が読み上げた「不滅の恋人への手紙」に、よく表れている。

ただし、あの手紙の文章は私のオリジナルのものではない。驚かれるだろうが、あの手紙の本当の作者は、かの大作曲家であるベートーヴェンなのである。

ベートーヴェンの遺品

ベートーヴェンは、遺品として「不滅の恋人へ」と題する手紙を残した。

青木やよひ氏の研究によって、この不滅の恋人の正体は、アントーニア・ブレンターノという人妻であることが推定されている。いや、これは確定であって、おそらく間違いのないことだろう。

私は、その「不滅の恋人への手紙」の中の一番印象ぶかいところを「アサジのチェリアへの想い」としてトレースして使った。つまり既成文章を、『鳥の人』という作品に掘り込ませた訳だ。まるで他人の臓器を、自分の体に移植したかのように。

だが、この臓器移植は成功していると思う。拒絶反応は見られないと思う。

つまり、既成文章とアサジの内心との間には、これを読んだ皆さんのにも、まったくズレがなかっただろうと思う。というより、ここには、まるでベートーヴェンが、アサジの気持ちを代筆しているかのような同通性すらある。

それにしても、どうして急にベートーヴェンが出てくるのだろう。それを疑問に思う方も多いだろう。しかし『アトラス』は、実はベートーヴェンとの縁が深い作品なのである。それは登場人物の名前を見れば分る。

ドロテア・チェチリア

私の『アトラス』は、大いなる母性の物語であるが、構成としては、まず冒頭でオロティアが「肉身の母性」を提示し、終盤でチェリアが「霊的な母性」を提示する形を取っている。

つまり二つの母性によって、ストーリーの始まりと終わりとを、重ね合わせたのである。分かりやすく言えば、二つの点を重ねて一つにした。あるいは一つの環にしたという事だ。

よって、いわばオロティアとチェリアは、ある意味で一体なのである。

だが、それもそのはずで、実はこの二人は、『ドロテア・チェチリア』という一つのピアノ曲から、その各々の名前を貰っているのである。この曲を作ったのは、もちろんベートーヴェン。

つまり、ドロテアがオロティアになり、チェチリアがチェリアになった。つなげて言えば『ドロテア・チェチリア』が「オロティア・チェリア」になった訳だ。

正式には「ピアノ・ソナタ第二八番、イ長調、作品一〇一」というのが、このピアノ曲の曲名になるが、この曲のあだ名が『ドロテア・チェチリア』なのである。その名は、ベートーヴェンが、ドロテア・フォン・エルトマンという女性に、この曲を捧げたことに由来する。

人名と神名の組み合わせ

ドロテアは優れたピアニストだった。そして、チェチリアとは、ローマにおける音楽と芸術の女神（守護聖人）である。

つまりベートーヴェンは、名ピアニスト、ドロテアを、女神のように敬いながら、彼女に、この第二八番のピアノ・ソナタを捧げたのである。こうして『ドロテア・チェチリア』という曲名が生まれることになる。

ではなぜ、この曲名が、アトラスの登場人物の名前になったかと問われれば、最初の執筆時期に、このピアノ曲を好んで聴いていたから、と答えるしかない。

加えて「ドロテアが人名で、チェチリアが神名」だというのも、「オロティアが肉身の母性、チェリアが霊的な母性」の表現者であることとリンクするので、たいへん都合が良かったと言える。

もっとも、今は第二九番の『ハンマー・クラヴィア』のほうが好きなので、今『アトラス』を執筆したなら、オロティアはハンナ、チェリアはクラウディアあたりになっていたかもしれない。もちろん、これは冗談であるが。

それと、チェリアの母であるセフィーネも、やはりベートーヴェン由来の名前である。ベートーヴェンは、ヨゼフィーネ・ダイムという人妻に恋をしたことがあり、このヨゼフィーネが、セフィーネの名前のもとになっているのである。

釈迦弟子の名前を持つ勇者たち

ついでに言っておくと、島の勇者たちにも、まとまった名前の由来がある。

バッティーヤ、コースタニヤ、アサジ、ナーマン（アサジの息子）、これらは、みなお釈迦さまの最初期の弟子の名前なのである。何となく響きが好ましかったので使わせていただいた。

さらに、お釈迦さまが活躍したのがインドであるので、インドつながりでイド（インド）やカラム（カルマ）、あとは語形変化なしのマゴラーやキンナラが生まれた。

マゴラーもキンナラも、インドにおける悪鬼の名前である。

(3) おわりに

初稿の『アトラスの深層』は、今回の改訂（二〇一八年）によって、二倍以上の規模に拡大してしまった。とくに、第6章「デルフィの巫女」、第7章「手塚作品の痕跡」、終章「登場人物の名前」は、完全なる書き下ろしである。

読者の皆さんとしては、第9章の「東方の物語」と、第10章の「鳥の人」が、思わぬ収穫だっただろう。

とくに「鳥の人」は、もう一度『アトラス』の世界に戻れた「懐かしいお得感」があったと思う。挿絵のほうも、『アトラス』と同時期のものだ。

実を言うと、この「鳥の人」は、これまで妻にしか見せたことがない作品だった。一五年ほど前、妻にこれを読んでもらったとき、

「そうだね、アサジだって、ずっとチェリアだけを想ってる訳にはいかないもんね」

という感想をもらったのだが、その時の妻（ただし結婚前）の表情が何とも寂し気だったのだ。

その顔をみて私は、

「ああ、これは『アトラス』を好きになった人にとっては、あまり嬉しくない作品かもしれない」

と、思った。さらには、これを公にするのが怖くなってしまった。

そのため『鳥の人』は、長らくお蔵入りしてしまったのだが、今回は、その気持ちを吹っ切らせてもらった。妻とは違う感想をもつ読者もあるだろうと思ったからである。

さて、十七歳のときの「チェリアの幻視」から始まった、この『アトラス』の執筆であるが、今なお「この作品こそは自分の半身である」という気持ちが消えないでいる。

これは私にとって、本当に大切な作品である。アルベド侵入を受けて出来た文学作品のサンプルとしても重要だろう。

読者の皆さんにとっても、『アトラス』が大切な作品となることを願うばかりである。

アトラスの深層 II

著 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
